



## か え ん じ 花園寺の歴史



花園寺跡は、もとと文禄4年（1595）にこの地に居館を築いた戦国武将・島津義弘が、朝晩に仏前勤行した看經所※があった場所といわれています。居館の南西部に位置し、南辺には東隣の稲荷神社から続く当時の石垣が残っています。

「米良家文書」によると、島津家久（義弘の三男、初代薩摩藩主）の五男・忠広は、寛永9年（1632）13歳で修験者（山伏）※となりました。寛永12年（1635）には、参勤する家久に同行し京都醍醐寺三宝院（修験道当山派本山）に出仕し、その後江戸滞在中に家久から看經所持仏堂を芝藩邸に与えられました。しかし、まもなく起こった江戸の大火のために帰国することになり、同年9月加治木に帰着すると、あらためて家久屋形内に看經所を建立してもらい、「日陽山花園寺宝寿院」（真言宗）の称号を与えられました。

寛永14年（1637）島津義弘の長女千鶴（御屋地様）の養子となっていた忠広が帖佐居館に入ると、花園寺もここに移されました。寛永16年（1639）忠広は、兄である2代藩主・光久の命で還俗し、翌年鹿児島に移居したため、花園寺は修験者の米良存良坊重真に与えられ、薩摩藩主家の武運長久と息災延命等を忠広に代わって祈願・勤行することを命ぜられました。この役は米良家に代々引き継がれ、廃仏毀釈が起こる明治2年（1869）まで花園寺は存続しました。

近年の発掘調査では、2棟の掘立柱建物が確認されました。はっきりした時期は不明ですが、居館跡石垣に平行して建てられていることから、居館または花園寺に関係する建物跡であると考えられます。

また、石垣の北側には枯山水※様式の庭園跡が残っていました。後世に庭石の多くが失われており全体像は分かりませんが、庭石の特徴や配置から江戸時代前期に造られた可能性があります。

※看經所…経文を黙読する場所。

※修験者（山伏）…厳しい山岳修行により天地の諸神・諸霊を操作できる力を備えた超能力者として信じられ、戦勝祈願などの占いや祈祷を行い重用された。

※枯山水…水を用いずに石や砂などにより山水の風景を表現する庭園様式。



京都・大徳寺大仙院  
書院庭園の石組



花園寺枯山水庭園の復元イメージ  
〔市文化財保護審議会委員 岸野純一氏作図〕



## 鍋倉・宇都地区の史跡・文化財

始良市鍋倉宇都地区は史跡・文化財が多く、歴史豊かな場所です。

帖佐新正八幡神社<sup>①</sup>がある山頂部は、鎌倉時代の弘安5年(1282)に京都石清水八幡宮の神官・平山了清が築いた平山城<sup>①</sup>(別名:平安城・帖佐城)で、戦国時代まで多くの武将が在城しています。

帖佐小学校は江戸時代の帖佐郷飯屋のあった場所で、東側の山頂には「ホソ神サア」と呼ばれた米山薬師<sup>②</sup>があります。米山薬師の創建は室町時代の文明年間(1469-1486)といわれています。米山薬師の南麓にあたる別府川沿いは江戸時代の物流拠点として栄えた納屋町<sup>③</sup>です。

また小学校付近は豊州家島津氏の菩提寺であった総禅寺<sup>④</sup>であり、現在は墓地だけが残っています。総禅寺墓地には、瓜生野城(後の建昌城)を築いた豊州家島津氏初代季久の墓、文禄の役で病没した島津豊後守朝久の墓、島津義弘の長女で朝久の妻である千鶴(通称:御屋地様)の墓があります。墓地の入口には、西南戦争の招魂塔と従軍記念碑があり、記念碑には勝海舟が揮毫した「思舊開素懐」の文字が彫られています。

稲荷神社<sup>⑤</sup>は、慶長の役で島津軍の窮地を救った赤・白2頭の狐を祭って、島津義弘が慶長3年(1598)に創建したといわれており、元は帖佐新正八幡神社の下にある高尾城にありました。その後、社地が崩壊する恐れがあることから文政10年(1827)に現在の場所に移築されています。稲荷神社は別名「高麗稲荷」「戦死稲荷」とも呼ばれています。

この稲荷神社を南東隅にして南北約211m、東西約150mの範囲が島津義弘居館跡(通称:御屋地跡)<sup>⑥</sup>です。義弘は文禄4年(1595)12月に朝鮮半島から帰国し、居城を栗野から帖佐へ移しました。今も残る石垣の石は、加治木の湯湾岳から切り出し、中には蒲生地頭・長寿院盛淳の「御加勢石」と呼ばれる巨石もあるといわれ、工事は家老の新納旅庵が監督しました。稲荷神社境内の東側に玄関にあたる「大手口」があり、ここにあった大手門は江戸時代の初めに出水麓の飯屋(現・出水小学校)に移されました。島津義弘は慶長11年(1606)に平松城(現・重富小学校)に移るまで11年間この館に居住しましたので、慶長5年の関ヶ原の戦いで敵中突破を敢行し、命からがら帰った場所にあたります。義弘が平松城へ移住した後は、島津久賀(豊州家島津7代)、御屋地様、島津忠広(家久五男)が居住しました。

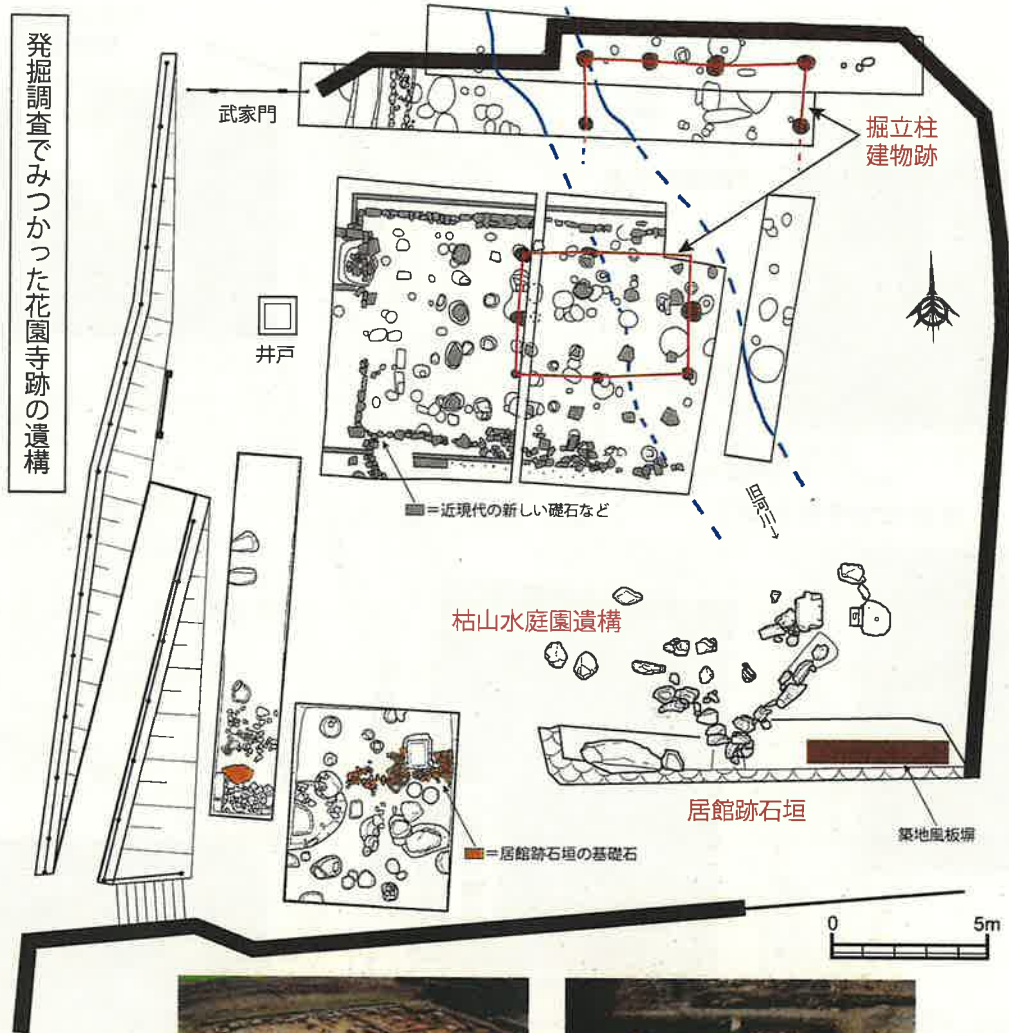
今回整備した花園寺跡は義弘が朝晩仏前勤行をした看経所があった場所で、江戸時代には「日陽山花園寺」(真言宗)を名乗り、代々修験者の米良氏が住職を勤めました。

館の北西には、古帖佐焼宇都窯跡<sup>⑦</sup>[県指定史跡]があります。千利休に教えを請うなど茶の湯に造詣の深かった義弘は、ここで朝鮮人陶工金海(日本名:星山仲次)に窯を築かせ、自分好みの茶器(抹茶碗や茶入など)を焼かせました。現存する薩摩焼最古の窯で、白薩摩の源流といわれています。

その他、茶の湯の水を採取したといわれる井戸跡・お茶の水<sup>⑧</sup>や日向伊東氏との木崎原の戦いで義弘の命を助けた愛馬・膝蹴驛の墓<sup>⑨</sup>など義弘ゆかりの史跡が数多くあります。

①平山城跡  
帖佐新正八幡神社





掘立柱建物周辺



居館跡石垣の基礎石

# 花園寺跡 石碑

時延宝九白龍集辛酉孟秋日因園果満金剛仁

願以此功德 普及於一切

奉讀誦妙法華經一千部

我等与衆生 皆 佛道

日陽 大僧都法印重真有一一印



延宝九年一六八一年

正徳元

華園寺

奉讀誦妙法蓮華經一千部

大越家

八月 日



正徳元年一七一一年